

受賞おめでとうございます

新井宿自治会連合会総会 感謝状贈呈

- 《退任会長》 金子 泰士
- 《退任副会長》 渡辺 治雄 平林 徹夫
- 《永年在職者》 山崎 晴久 梁田 ユリ子 平林 宏一
- 中村 政恵 栗原 正明 高野 千恵子 立谷 芳朗
- 田中 タネ 和田 芳明 中澤 洋 大間 俊雄
- 原田 俊 中田 忠一 金井 英雄 植木 茂
- 齊藤 富喜子 (敬称略)

親子で楽しめるカフェ紹介

親子で気軽に楽しめるカフェが大森郵便局横を入り、ほぼ1分くらいのところにあります。名前は『cafe verde (カフェ ヴェルデ)』(verdeはイタリア語で緑色。癒しの色のイメージで決めた名前)。2人の現役ママがこんなお店が欲しいという思いから開き、キッズコーナーやおむつ交換台もあります。ワークショップやイベントはすべてお子様同伴もOKとされており、少しくらい騒いでも「お互い様」と大目に見るところが嬉しいですね。さらに子育てで疲れた首、肩、背中、脚のオイルマッサージのサービスを受けられる癒しのスペースもあります。子供を他所に預けずに受けられ、心身共にリラックス、リフレッシュすることでしょう(有料・要予約)。

また、ヴェルデでは無農薬玄米を三日以上発酵させた体に優しい酵素玄米のおむすび、保存料・化学調味料・動物性原料不使用のカレー、低アレルギースイーツなど食に関しても配慮が行き届いていて、現役ママのアイデア溢れるお店でした。

☎ 第2・4水曜、日祝 ☎ 10:00~17:00



中央四丁目町会「東京防災隣組」に認定

東京都は地域防災力を向上させるため、意欲的な防災活動を行う団体を「東京防災隣組」として認定しました。認定されたのは都内の36の団体で、大田区内からは3つの団体が選ばれ、4月15日、都庁で認定式が行われました。

認定された中央四丁目町会では、地元の総合病院と相互応援協定を締結し、災害時の入院患者の誘導支援を行うことになっています。

「東京防災隣組」に認定された団体の活動は、都のホームページや冊子などで紹介されるとのことです。

『大森日赤フェスタ2012』開催

中央四丁目の大森赤十字病院では、赤十字の理念や活動を知ってもらい、東日本大震災の現状を報告する「大森日赤フェスタ2012」を5月26日に開催。「つなげよう!東北の未来へ」をテーマに、被災地の食材を使った炊き出しで復興支援も行われ、岩手県産の野菜がたくさん入ったひつまみ汁が振舞われました。

震災から1年が経過した今、震災を風化させることなく、復興に向けた継続的な支援を目的に、義援金の受付を行い、イベントの収益を義援金とするなどして、少しでも復興へつなげたいとのことでした。

ダイシン百貨店グランドオープン

建て替えをすすめていたダイシン百貨店の全工事が完了しました。フロアは1階から3階が売場、4階と一部緑化された屋上が200台収容の駐車場となっています。また、歩道の混雑を解消すべく、道路からセットバックして、樹木と緑化壁面のある駐輪場も設けられました。

新店舗の目標は「地域のインフラ施設となること」ということです。大いに期待したいものです。

新井宿地区自治会・町会夏祭り開催日程

山王三・四丁目自治会	8月19日(日)	子どもまつり
中央一丁目町会	8月26日(日)	納涼祭
中央四丁目町会	8月26日(日)	すいか割り
新井宿六丁目町会	8月17日(金)・18日(土)	盆踊り大会
新井宿七丁目町会	8月25日(土)・26日(日)	盆踊り大会

編集後記

1面では、山王三・四丁目自治会が出版した絵本のご紹介です。先の東日本大震災は、私たちにも多くの教訓を残しました。未来を担う子どもたちを守るためにはどうすべきか、大人にも多く教えてくれる絵本です。2・3面では、昨年に引き続き、戦争体験を特集しました。

貴重なお話をお寄せいただいた皆様、本当にありがとうございました。戦争により、私たちが暮らすこの地域でも、多く被害があったことを決して忘れてはなりません。

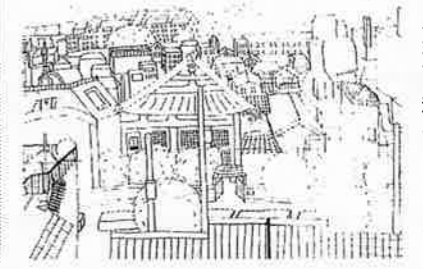
4面では、お祭りや地域のホットニュースを掲載しました。

(落合編集委員)

- 発行 地域力推進新井宿地区委員会
編集 「わがまち新井宿」編集委員会
- 山王三・四丁目自治会 編集委員長 高橋 紗英子
 - 山王三丁目東自治会 副編集委員長 荒木 秀樹
 - 山王三・四丁目自治会 編集委員 山崎 三津子
 - 山王三丁目町会 編集委員 荒井 壽子
 - 中央一丁目町会 編集委員 齋藤 香子
 - 中央四丁目町会 編集委員 若生 一順
 - 新井宿五丁目町会 編集委員 加藤 弘子
 - 新井宿六丁目町会 編集委員 河原 神風代
 - 新井宿七丁目町会 編集委員 落合 松枝

……共同編集……
監修 新井宿自治会連合会
事務局 大田区新井宿特別出張所
大田区中央4-31-14 ☎3776-5391
<http://www.city.ota.tokyo.jp/omori/index.html>

わがまち Araijuku 新井宿



「きれいな町の風景」
入新井第四小6年
溝淵 稀子さんの作品

ガタガタ村と大ナマズ



山王三・四丁目自治会が絵本を出版!

文 山王三・四丁目自治会
絵 寺田 順三
監修 河田 恵昭(関西大学社会安全学部学部長)
永田 宏和(NPO法人プラス・アーツ理事長)
発行 株式会社 Z会

今年の3月に、山王三・四丁目自治会が巨大地震に備える意識を高めようと、絵本『ガタガタ村と大ナマズ』を出版し、話題になっています。東日本大震災が起こる前から企画し、出版するまでの思いを自治会の秋山崇一さんに寄稿していただきました。

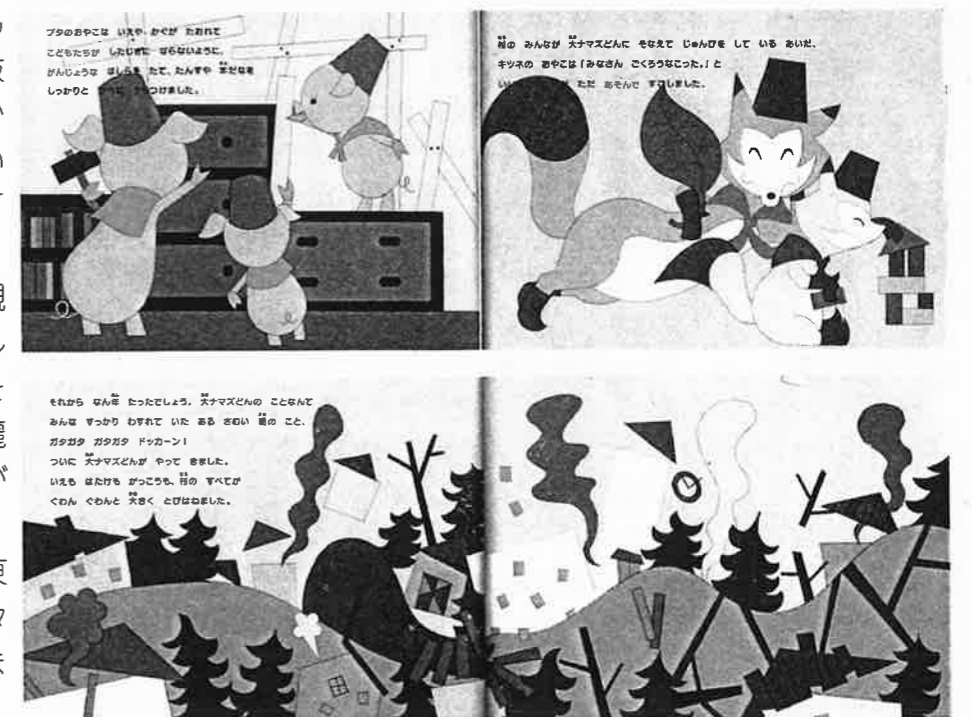
企画担当

山王三・四丁目自治会 秋山 崇一

東日本大震災が起こる2年前に、町で過ごす子どもたちを首都直下型地震から守りたいと考え、この絵本の制作は始まりました。阪神・淡路大震災の時に、消防や救急のプロは町に来ない現実を知り、有志8名で自主防災組織を結成。今では隊員はずいぶん増えましたが、安心できる能力には遠く及びません。災害弱者の「子ども」の生存の鍵は「日頃の親の備えにある」ことを知って行動を起こして欲しい。大地震がいつ起きても不思議ではないこの国で生き抜く為に、親子で語り合うきっかけになって欲しい。そんな願いをもつ町の仲間が多く参加して作った絵本です。

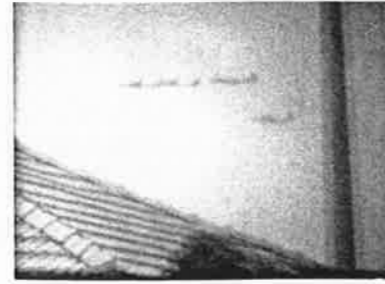
飽きのこない楽しい絵で、親から子ども、そして孫へと楽しく防災が語り次がれることを願っています。寺田さんの綺麗な色のかわいいキャラクターがお母さん方にも人気です。

この絵本の売上の一部は、東日本大震災の震災孤児に「ハタチ基金」を通して寄付されます。



未来へ語り継ぐ戦争体験

読者の方から昨年8月の戦争体験特集の続編を望む声が多数寄せられ、今号でも昨年引き続き戦争体験を特集することにいたしました。(敬称略)



▲春日橋上空を飛行するB29
(写真提供：郷土博物館)

忘れ得ない記憶

山王三丁目町会 鈴木 康紀

ある日、中学生だった私が幼い妹を背負って環七沿いを散歩していると、外国の国旗が描かれた飛行機が頭の上を1機飛んでいった。そのうちに大井方面から黒煙が上がった。先ほど飛んでいった飛行機が落ちたのかと思った。後にその飛行機がB25であり、初めて東京を空襲したことを知った。^(注1)やがて米軍は、私たちの暮らす区内部をも攻撃するようになった。はじめは、警察がよしなど空襲された場所を覆い隠していたが、すぐにそれもできなくなるほど攻撃は激しさを増していった。当時、馬込の桜並木のそばに東京電波という工場があった。米軍は、その工場が電波探知機を製造していたことを知っていたようだ。執拗に何度も焼夷弾を落とす。馬込の山から私たちの遊び場だった桜並木周辺が攻撃されるのを見るのは辛かった。

さらに戦争が激しくなり、私たち家族は疎開した。疎開先の伊東では、B29が編隊を組み、東京方面へ向かうのを見た。その編隊に向かって日本軍の飛行機が1機、向かっていったが、撃墜されて黒い煙を上げながら落ちていった。米軍は圧倒的に強かった。翌日、新聞で本所深川の空襲を知った。このまま家族全員で同じ場所には、血筋が絶えてしまう恐れがあるため、私は一人東京に戻るようになった。

戦争は激しかったが、授業は続いていたので、私もできる限り目白まで通った。警戒警報が鳴るたび授業は中断、帰宅命令が出る。原宿で列車が停まり、明治神宮の防空壕に避難することが度々あった。一度、日本軍の「赤とんぼ」と呼ばれる二枚羽の飛行機が防空壕の前に緊急着陸し、兵隊さんがすごい勢いで逃げ込んできたことがある。山手線が外回りしか走っておらず、上野の焼け野原を見ながら帰ったこともある。しかし、一番恐ろしかったのは、渋谷から歩いて帰るときのことだ。戦闘機が、超低空で私の方へ真っ直ぐ飛んできたのだ。パイロットと目が合った、と思うほど近かった。すっかり焼けてしまった町に身を隠すところなど何処にもない。慌てて側溝に身を隠した。パイロットはすべて上から見ている。死ぬ、と思った。

昭和20年6月からは金沢に疎開した。8月15日に玉音放送を聴いたが、戦争が終わったという実感はなかった。当時金沢に駐留していた日本軍第9師団が解散したときにやっと、「ああ、戦争が終わったのだ。」と思った。戦後の混乱期で東京にはすぐに戻れず、金沢で5年ほど過ごし、ようやく東京に戻った。

昭和30年ごろ、活力を取り戻し始めた大森で、偶然金沢で共に過ごした旧友と再会した。大森駅に到着する列車の窓から、彼は手を振っていた。私に向かって何か叫んでいる。それは、「もうすぐ結婚する。」との嬉しい報告であった。平和を実感した瞬間であった。

大和魂と米国魂

中央一丁目町会 田中 愛二

新井宿地区は二度に渡ってB29の大規模空襲に見舞われた。1回目は昭和20年4月15日夜半200機以上のB29が蒲田大森地区を襲った空襲、^(注2)2回目は5月25日から26日明け方まで続いたB29約450機による大空襲である。^(注3)これは山の手地区を目標にしたものであったが、大森駅付近や新井宿地区の被害も大きかった。

私はこの日、学徒動員で三鷹の中島飛行機に夜間勤務中だった、作業中の夜半空襲警報が鳴りだす、島の中の工場から学友と急いで近隣の畑に避難する。一緒に働いていた陸軍の工作兵の命令で、出来ている製品は大切だから持って逃げろという、製品を抱えて避難。辺りは漆黒の闇、程なく単機で東京の空に侵入してくるB29の黒い機影が見えだした。

日本軍の探照灯が何本も闇夜を照らした、巨大な光の交差に捕らえられる機影、突然近くの高射砲の陣地だろうか強烈な弾丸の発射音が響きだした。東京上空に単機ずつ次々つながって侵入してくるB29、低空で焼夷弾をばらまいては東京湾方面に離脱して行く。何機位のB29が繰り返し繰り返し来たのだろうか。

しばらくすると日本の夜間戦闘機の反撃が始まった、東京上空に侵入してくるB29に果敢に立ち向かう夜戦、発射する曳光弾の赤や青の美しい航跡、交錯する機関砲の弾道、巨大なB29の下に潜り込んで斜銃を発射する日本機の機影、探照灯の強烈な光の交差、投弾を終えて離脱して行くB29、必死の夜の空中戦。地上は次第に火の海になったのだろうか赤く染まってきた。

すると突然火を吹くB29の機影が闇夜に、我が日本軍機の応戦に被弾したらしい。見ていた我々の「やった、やった」の歓声上がる。しかしB29は墜落せずゆうゆうと火を吹きながらも飛んでゆく。

機影がだんだん小さくなり、落ちずに離脱してゆく様子。我々を落胆させたその時、機首を転じて再び火を吹いたままのB29が次第に大きく見えてきた、燃えながら引き返し飛び続けるB29、東京上空に戻ってきたと思った瞬間そのまま垂直に墜落していった。

日本には大和魂があると誇っていた我々が「アメリカの米国魂」を現実に見せられ驚嘆した戦中の記憶である。

(注1) 昭和17(1942)年4月18日、アメリカの空母から発進したB25爆撃機13機が東京を初空襲した。東京に対する空襲は、終戦までに122回に及び、多くの被害を出した。(総務省HPより引用)

(注2) 昭和20年4月15日 東京大空襲(総務省HPより引用)

(注3) 昭和20年(1945)5月24日は、東京の山の手地域と空襲で焼け残った町全体を目標として、525機のB29が渋谷・世田谷・杉並・目黒・大森・品川地域を爆撃した。さらに、翌日の25日深夜には、まだ焼夷弾による被害を受けていない東京の残存地域を目標として、470機が高性能焼夷弾3,000トンを下投した。被害は、山の手方面を中心に南多摩・北多摩にまでくまなく及んだ。(中央区HP平和祈念バーチャルミュージアムより引用)

爆撃飛行連隊で迎えた終戦

山王三丁目東自治会 石川 義雄

昭和20年8月15日朝、そこは埼玉県熊谷から一つ先の籠原という所で、深谷との中間。ここへ一年前19年に原隊の静岡県浜松の三方ヶ原中部第百十三爆撃飛行連隊が連隊毎移動していた。なぜ浜松から籠原へ移動したかはあとで話す。

朝の点呼の時、連隊命令で全員集合であった。いよいよ最後の時が来た。本土決戦だと感じ、心を決めた。毎日毎夜のように米国のB29の爆撃を受けていた。前夜も近くの熊谷と栃木県の太田飛行機製作工場で、B29により風船爆弾が落とされ、真昼のようだった。連隊の飛行場も爆撃を受けて穴だらけで、飛行機が飛べなかったくらいだ。

さて、連隊長の話は今日の正午に陛下より全国民に玉音放送がラジオであるとの事だった。皆本土決戦だと身辺整理をしていた。ふと気がついてあたりを見たが、物音一つしない不気味なくらいあたりが静かすぎる。いつものように空襲警報が全然無い。やがて玉音放送は始まった。そして終わった。長い時間ではなかった。ラジオは雑音ばかりで全く何を話したのかよく解らなかった。他の者に聞いたが皆同じ様であった。しばらくして連隊長は戦争は終わったと。日本は負けた。軍は全員武装解除という事で、全兵器は一ヶ所に集められ、飛行機は飛ばしてはいけないという事で兵隊は全くの丸腰になった。事務関係は書類が山のように表に出され火がつけられた。

そしていろいろなデマが流れた。兵は全員捕虜だという。常時、連隊には勤務の兵だけで他に分散していた。それは連日の空襲で戦死者が出ないようにとの事だった。連隊のあった場所は熊谷から秩父鉄道が出ており、寄居の手前で武川村という所だった。私達の中隊はその小学校にいた。ちょうど夏休みで児童はいなかった。

終戦の夜から異変がおこった。夜中に村人が食糧を盗みに来るのだ。皆顔見知りの人達でわけてあげたかったが、軍の物なので勝手にあげる事は出来ない。食糧倉庫は荒川べりの松林の中にあり、歩哨を出す事になった。

闇夜に一人でいる時、暗闇から男より女の人が出て来た時は米軍のグラマンF4の空襲より怖かった。

さて、話を前にもどし、なぜ浜松から埼玉の武川村へ来たかだ。米軍の空襲が18年、19年頃から激しくなり、硫黄島に爆撃に来るのは百十三の爆撃機というので、米海軍が遠洲灘沖から艦砲射撃を浜松と連隊に、また爆撃と連日連夜で浜松にいられなくなった。真夜中に軍用列車で蒲田を通った時はまだ空襲を受けていない時だった。なつかしかった蒲田東口駅前の商店街だった。武川の連隊から赤々と燃える蒲田地方が見えた。終戦から一週間後全員捕虜にもならず兵役免除命令が出て、満4年足かけ5年の国への命をかけての御奉公は終わった。



▲昭和16年、入隊直前に撮影した写真(当時20歳)